「日々の理科」（第 3155 号）　2023,-3,27

「最後の春みつけ（４）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

今回の「春みつけ」の活動は、１年生にとっては最後の校舎外の活動になった。よく晴れて暖かい日だったので、子どもたちも外に出られるだけで嬉しそうだった。

大学構内に位置する本校の場合、大学構内の活動に限れば、特に「校外学習願」のような書類の提出はなく、会議室の黒板に日時とクラスを書くだけで良い。

講堂中庭のシダレザクラは満開だった。「地面に落ちる前に、花びらをキャッチすると良いことがある」という言い伝えは、私が子どもの頃にもあった。子どもたちの間でも、それに似た現象が見られて、地面に落ちる前の花びらを、空中でキャッチする遊びが流行していた。

ここでも R-1（小さな乳酸菌飲料）の容器が役立った。サクラの花びらは脆弱なので、ポリ袋に密閉すると、すぐに萎えてしまう。硬い透明容器だと、家に帰るまで持つことが多いのだ。子どもたちはゲットした花びらを容器一杯に入れて持ち帰った。

花の蜜や花粉が好きな野鳥は何種類かいる。メジロはよく花の咲いた木の枝で見かけるだろう。この日は、ヒヨドリが一羽来ていた。最初は盛んに密を吸っていたが、子どもたちが集まってくると、シダレザクラの一番高い枝にとまって、子どもたちの不思議な遊びを見学していた。しかし声の大きいな女児が「あ、ハトがいる！」と叫ぶと、「ちがうっ！」と一声だけ鳴いて去っていった。春の晴れた日の、本当に楽しい春みつけだった。